

関西大学独逸文学会研究発表概要（第113回研究発表会）

その他のタイトル	Resumee der Forschungsberichte bei der Tagung 2021
著者	高橋 秀彰, 吉満 たか子, 小西 優貴, 工藤 康弘, 柴 亜矢子, 松本 大希
雑誌名	独逸文學
巻	66
ページ	93-105
発行年	2022-03-20
URL	http://doi.org/10.32286/00026763

関西大学独逸文学会研究発表概要

(第113回研究発表会)

シンポジウム1：ドイツにおける移民を対象とする教育政策 — 移民の社会への統合とその課題

はじめに

高橋 秀彰

およそ四人に一人の在住者が移民の背景を持つドイツでは、多文化・多言語の共存を実現させようと、さまざまな取り組みが行われている。そこで中核をなすのはドイツ語教育であるが、移民の言語背景を考慮に入れた多様な言語の教育も重要になっている。ドイツでは同化ではなく統合を目指す言語教育政策を推進することで、多様な人々が調和ある生活の実現に向けて成果を上げている。本シンポジウムでは、統合コースや小学校でのドイツ語教育、出自言語教育の現状を考察し、移民・難民の統合の意味と方向性を言語教育の視点から探る。

まず、吉満たか子（広島大学外国語教育研究センター准教授）は、ドイツで行われている移民・難民のための統合コース（*Integrationskurs*）の授業を取り上げ、特にコロナ禍で導入された「授業継続のための5つの授業モデルの提示」の考察を行った。続く小西優貴（本学大学院外国語教育学研究科博士後期課程）は、移民背景を持つ児童生徒の出自言語（*Herkunftssprache*）やその他の外国語など多言語を取り上げることが学習指導要領に規定されていることに着目し、初等教育で使用されているドイツ語教科書の分析を行った。高橋秀彰（本学外国語学部教授）は、高度経済成長期にドイツへ渡ってきた外国人労働者の子供を対象に開始された出自言語教育の持つ意義が変遷してきた流れを概観し、その

問題について検討した。シンポジウムの司会は高橋が担当した。

(1) コロナ禍におけるドイツの移民・難民のための統合コース

吉満 たか子

ドイツでは2005年の移民法施行に伴い、移民・難民を対象とした統合コース（Integrationskurs）が開始された。このコースの参加者は600時間のドイツ語授業を受講し、その後100時間をかけてドイツの法制度や社会生活について学ぶが、政府はこのコースを終了した移民・難民がCEFRのB1レベルのドイツ語を習得することを目標としている。統計によれば2005年の開始以降、2020年までに約243万人が統合コースを受講している。毎年を受講者は、欧州難民危機の影響を受けた2016年度の約34万人をピークに、2019年度には17万6千人にまで減少した。コロナ禍の影響を受けた2020年度を受講者は、10万6千人であった。

コロナ禍でドイツへ流入する移民や難民の数は激減したと言えるが、ドイツ政府は移民・難民統合の歩みを止めることはなかった。2020年3月中旬から行われたドイツのロックダウンの前後において、統合コースを管轄する連邦移民・難民庁（Bundesamt für Migration und Flüchtlinge, 通称 BAMF）は様々な対策を打ち出した。その中の1つが「授業継続のための5つの授業モデルの提示」である。

5つの授業モデルとは、(1) 十分な広さの教室での対面授業、(2) ビデオ会議システムを使用するヴァーチャル教室、(3) 対面授業とその別室へのライブ配信、(4) 対面授業とヴァーチャル教室の併用（いわゆるハイフレックス型授業）、(5) 2つの教室を使用した対面授業である。コロナ禍での統合コースはこのいずれかのスタイルでのみ実施が可能であるが、2020年7月から2021年3月までに実施された統合コースの約8割はモデル(1)の「十分な広さの教室での対面授業」であった。これは、「オンライン環境やPCなど機材が十分ではない」、「PCの扱いに慣れていない」、「家族や子供と暮らす自宅では受講がむずかしい」など受講者が抱える問題に配慮した結果であるが、多くの受講者にとり、この統合コースがいわば「ドイツ社会への窓口」でもあるため、対面授業

が優先されたとも考えられる。いずれにせよ、コロナ禍においても統合コースの休止を最小限に食い止め、現場の教員の混乱を防ぐために移民・難民庁がきめ細やかな対策を打ち出し、それらを随時通達している点は、日本も見習うべきなのではないだろうか。

(2) ドイツの小学校国語教育における多言語：教科書の内容を中心に

小西 優貴

移民背景を持つ人々の増加に伴い学級の多言語化が進んでいるドイツでは、小学校の国語科（ドイツ語科）において、移民背景を持つ児童生徒の出自言語（*Herkunftssprache*）やその他の外国語、方言などの多言語を言語比較等の形で扱うことが、各州文部大臣会議（*Kultusministerkonferenz*）の『教育のスタンダード』（*Bildungsstandards*）や各州の学習指導要領において指示されている。本発表では、それがどのように反映されているのかを、ドイツの小学校で用いられている教科書を対象に、(1) 扱われている言語、(2) それに付随する課題の内容に注目して紹介した。

扱われている言語に関して言えることは、英語とフランス語を始めとする欧州の代表的な言語が中心となっているということである。その他の言語圏の言語、特に出自言語として話されていることが多い言語（トルコ語、ポーランド語、ロシア語、アラビア語など）はあまり扱われていない。この中でもトルコ語は比較的良好に登場する部類に入るが、欧米の言語には及ばない。この傾向は一部の例外を除き、基本的にどの教科書にも共通であった。ドイツ語との近さ、英語やヨーロッパとしての一体感の重要性に鑑みれば、この現状は理解できる。しかし、それは移民背景を持つ子供の出自言語を扱わなくてもよい理由にはならない。出自言語として話される言語の数は膨大である。今後はその中でどの言語を取り上げていくのか、また教科書で扱いきれない言語をどのように考慮していくのが課題となろう。

課題の内容については、以下の5つに分類できる。すなわち (1) 外

国語の語句や文を見て何語であるかを判別する課題、(2) 外国語の語句や文を意味ごとに並び替えたりする課題、(3) 外国語の語句や文をクラス内の出自言語やその他の言語に翻訳する課題、(4) 漢字や非ラテン文字を書き写す、外国語の歌を歌うなどの体験的な課題、(5) 言語比較を行う課題（例えば、冠詞に注目して）である。学習指導要領では、多言語を扱う主な理由として、言語比較によってメタ言語能力の育成を目指す側面があることが記されている。しかし、これらの課題を見るに、そうした目標が達成できるかどうかは疑わしいところがある。例えば、言語の判別や意味ごとの並べ替えと言っても、国旗や色分けによって言語分析的な視点がなくても課題に答えられるような構成になっている。また、言語比較系の課題についても、例のように特定の文法等に焦点を絞って分析させるものは少数であり、基本的には「語句を比較してみましょう」、「何に気づきますか」などのオープンな課題設定が多く、教員が工夫しない限りは表面的な活動に終始してしまう可能性が高い。全体的に多言語との出会い自体を目的としている印象が強くと、多言語の国語教育への統合はまだ不完全であると考えられる。

ドイツの小学校国語教科書からは、現在の多言語的な要請に応えようという姿勢は十分に伝わってくる。しかし、上述のように、扱われている言語にしろ、それに関する課題にしろ、まだまだ検討の余地があり、萌芽的な段階にあることが窺える。今後、ドイツの小学校国語教科書が、本発表で見た二つの観点においてどう発展していくかを注視したい。

(3) ドイツの移民の多言語学習：出自言語とアイデンティティ

高橋 秀彰

ドイツでは、多数の移民が社会に統合できるように、統合コースを通じてドイツ語習得並びに文化や歴史、社会への理解を深められるよう努めている。また、学校教育でも様々な取り組みが行われており、その中でも学習者の出身地の言語を教える出自言語教育（Herkunftssprachenunterricht、HSU）の持つ意義については、再検討が必

要な段階に来ている。本発表では、HSUがドイツ語習得やアイデンティティ形成に及ぼす影響も考慮に入れながら、ドイツの学校における言語教育のあり方を考察した。

ドイツでは1964年における各州文部大臣会議（KMK）の決定により、外国人の子供をHSUでも支援することになった。母語並びに出身国のランデスクンデの授業を求めることがヨーロッパ共同体理事会指令（*Richtlinie des Rates*）で規定されたのが1977年7月25日なので、ドイツではこれに先んじてHSUを開始していたことになる。当初は、外国人労働者（*Gastarbeiter*）の子供たちが本国に帰国した際に適応しやすくすることへの配慮からHSUを導入したが、ほとんどの外国人労働者とその家族はドイツに留まっており、再適応を想定して開始したHSUの存在意義は失われていた。しかし、1980年代以降にも、依然として家庭内及び出身国とのコミュニケーションの重要性を認め、ドイツへの統合と出自言語の習得の両方を促進する方針を維持した。1990年代に入ると、ヨーロッパで複言語教育の促進が求められるに至り、これに呼応する形でHSUを存続させていた。

HSUのあり方が問われたのは、いわゆるPISAショック以降になる。2000年にOECDが開始したPISA（*Programme for International Student Assessment*）（学習到達度調査）において、第1回目にはドイツの生徒が平均以下の成績であったことにドイツの教育界は衝撃を受けた。移民の背景のある子供たちについて、ドイツ語力の欠如が各科目の成績を低下させる要因となっているとの分析もあり、ドイツ語教育を重視すべきとの主張が増えた。そこでは、*Cummins*の相互依存仮説（*Interdependenzhypothese*）が援用され、第1言語を十分に習得しなければ、第2言語の習得が十分行えないと考えられた。これに沿った形で、2言語で敷居（*threshold*）を超えた能力に到達できれば、3番目の言語において単一言語の子供よりも高いレベルに到達できるとされた。しかしながら現実には、あらゆる子供に2言語の習得を求めるのは容易ではなく、ドイツ語学習に集中させるべきとの主張も少なくない。一方、子供が自らのアイデンティティを確立することも企図するHSUが、公教育を通じていかにあるべきかについては、今後さらなる検討が必要である。

ドイツ語に加えて、外国語ならびに出自言語を教育するという考え方は、欧州で定着している複言語主義にも合致するが、HSU 存続の合理的な意義が見出せない状況では、外国語教育に組み込む方向でカリキュラムを構築するなど現実的な施策が求められよう。

シンポジウム 2：コーパスを用いたドイツ語史研究 ——ゲーテにおける mögen の用法を中心に——

シンポジウム全体の概要

工藤 康弘

現代ドイツ語の mögen は können と意味が重なるなど、使い方にとまどうことがある。これは mögen がたどった歴史的変遷の結果とも言える。16 世紀において mögen は能力「～できる」の意味を持っていた。またその接続法 2 式 möchte も「～できる」の意味を保持しており、願望「～したい」を意味することはまれであった。今日、mögen は能力を意味する機能を können に奪われている。また現代語の möchte は mögen と袂を分かち、「～したい」という固有の意味を持っている。16 世紀以降、mögen に関する歴史的変化がいつどのように起こったのかはよくわかっていない。本シンポジウムはゲーテにおける語法を調べることで、近世と現代の隙間を多少なりとも埋めようという試みである。司会進行は工藤康弘、発表者は順に柴亜矢子、河野瞳グレン、松本大希、原あゆな。柴以外は本学文学部ドイツ学専修の学生である。ここでは 4 人の発表が連なって、1 つの結論へと収斂するように構成されている。

まず柴はゲーテ時代を定義づけたあと、当時出版された辞書の記述を分析した。それによると、mögen に「できる」の意味があるほか、möchte に願望を表す用法がある。

河野はまず現代ドイツ語の文法書と辞書の記述から、mögen と möchte の用法をまとめた。その結果以下のようなことが言える。①直説法の mögen の主たる用法は可能性（～かもしれない）である。②接続法 möchte は主語の願望（～したい）を表す。③「～できる」は

mögen/ möchte の主たる意味ではない。ところで、近世のドイツ語では目的文に können や mögen がよく現れる。目的文がその性格上、「～できるように」という意味を持つことと関連があると考えられる。河野は文献に依拠しながら、現代語の目的文に現れる動詞の語形をまとめた。それによると、目的文には本動詞の直説法のほか、können、sollen が現れる。

松本はゲーテのテキストを分析した結果、以下のことを明らかにした。① mögen (möchte を除く) の意味としては「かもしれない」が多く、「できる」は少ない。② möchte の意味としては「かもしれない」と「したい」が多い。

原はゲーテにおける目的文に現れる動詞の語形を調べた。60個ある damit 文のうち、本動詞が39個（うち30個は接続法）、話法の助動詞が21個（können が14個、mögen が7個）確認された。ゲーテの目的文には本動詞の接続法が多く現れるが、können と mögen も現れ、特に mögen は数は少ないものの、「できる」の意味との関連を推測させるものである。

シンポジウム全体として、mögen に「できる」の意味が少ないことは、現代語に近づいていることを示している。他方、möchte に「したい」の意味と並んで mögen と同じ「かもしれない」の意味があることは、möchte が現代語とは異なり、mögen（直説法）から独立していないことを示唆するものである。月並みな結論ではあるが、ゲーテは近世から現代への途上にあると言える。

以下では、シンポジウムの中でもボリュームの大きかった2つの発表の概要を示す。

ゲーテコーパス、および mögen に関するゲーテ時代の文法家の記述について

柴 亜矢子

現代ドイツ語の mögen には「～かもしれない」という意味がある。この意味は、können でも使われていることから、können にすればいい

のか mögen にすればいいのかわからないことがある。mögen とその接続法Ⅱ式 möchte には「～することができる」という意味が、近世において見られた。しかし現在では、mögen は「～かもしれない」という意味で使われ、möchte は「～したい」という意味で使われている。つまり現代では mögen や möchte は「～できる」という意味で使われることはあまりないのだが、近世の「～できる」という意味が、現代ドイツ語で使われている「～だろう」、あるいは「～したい」という意味に変わった過程は明らかにされていない。

そこで本発表では、18世紀から19世紀の mögen と möchte の意味と語法をゲーテ時代に出版された辞書を手がかりにして明らかにしたいと思う。

ゲーテ時代とは、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテが活躍した1749年～1832年のことを指し、この時代はドイツ語の成熟が見られる。文学史的にみると、ドイツ精神史上の最高峰の時代と言われ、シュトゥルム・ウント・ドラング、古典主義、ロマン主義といった三つの時代が含まれている。また1813年にプロイセンがナポレオン軍に勝利したことをきっかけにして、教養人たちは一層ドイツ語に愛着を覚えるようになる。ドイツ語の歴史的な流れが書かれている、König Werner の „dtv-Atlas Deutsche Sprache“ (2007¹⁶) によると、1800年までにはおよそ120冊の文法書が出版されている (2007¹⁶: 104)、ことから、ドイツ語への関心が高まっていることがわかる。

そのドイツ語の成熟期に出版された文法書や辞書、あるいはそれ以降に出版された文法書や辞書から5点の辞書を取り上げ、mögen と möchte の意味を比較したいと思う。その辞書は Adelung, Johann, Christoph (1798²) の „Grammatisch-kritisches Wörterbuch der Hochdeutschen Mundart“ (3. Theil von M- Ser.), Leipzig, Campe, Joachim, Heinrich (1809) の „Wörterbuch der Deutschen Sprache“ (3. Theil), Braunschweig, Grimm, Jacob/ Willhelm (1885) の „Deutsches Wörterbuch“ (Bd. 12. L-Mythisch), Leipzig, Sanders, Daniel (1909⁸) の „Handwörterbuch der deutschen Sprache“ Leipzig, Sanders, Daniel (1863) の „Wörterbuch der deutschen Sprache“ (Bd. 2. 1.Hälfte. L-R.), Leipzig, Wenig, Christian (1870⁵) の „Handwörterbuch der deutschen Sprache“ Köln である。この5つの辞書は、

このゲーテ時代とゲーテ時代以降に出版されている。例えば、アーデルング（1798²）とカンペ（1809）はゲーテ時代、ヴェーニヒ（1870⁵）、グリム（1885）、ザンダース（1863）はゲーテ時代以降に作られている。つまりこのゲーテ時代とゲーテ時代以降に発行された辞書によって、ドイツ語の成熟期のことばを知ることができる。

まず *mögen* を概観すると、一貫して「～することができる」、「可能性が高い / 低い」という項目が見られ、「～してもらいたい」という話者の主観的な願望を表わす意味が、アーデルングとカンペ、ザンダースだけで確認することができた。*möchte* を概観すると、一貫して「十中八九実現できる可能性が低い」、「願望文」という項目が見られ、「可能性が高い」という意味はアーデルングからヴェーニヒまで確認できるが、それ以降は見られない。また「認容文」の項目はグリムだけで確認することができたが、ほかの辞書では確認できなかった。

この5つの辞書を概観して、「～できる」という *mögen* の近世の意味はゲーテ時代でも使われていることがわかった。その意味を残しながら、現代ドイツ語にも通じる「可能性が低い」ことを表わす *mögen* の意味がゲーテ時代で使われるようになった。またゲーテ時代の *möchte* は「願望文」で使われており、現代ドイツ語の「～したい」に発展しつつあると言える。

ゲーテにおける *mögen* と *möchte* について

——『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』を中心に——

松本 大希

はじめに

ゲーテコーパスを用いて、ゲーテにおける *mögen* と *möchte* の用法について考察した。当発表では *mögen* の直説法と接続法におけるそれぞれの用法や意味を、原文と日本語訳の両方を用いて分析する。

日本語訳は山下肇訳¹（1962）と、登張正實訳²（1981）、を参考にした。ドイツ語原文は Goethe（1982）³ を用いた。

分析について

今回は 259 個の mögen を確認し、そのうち 247 個を分析した。まずこれらを直説法と接続法に分類し、さらにそれぞれ現在と過去、第 I 式と第 II 式に下位分類した。そのうえで mögen と möchte の用法についての詳しい分析を試みた。

以下に分析結果を示す。

mögen の直説法現在

<i>mögen</i>	かもしれない	できる	したい	好きである	その他	不明	訳なし	計
潮出版社	44.0%	7.7%	28.6%	2.2%	5.5%	6.6%	5.5%	100%
個数	40	7	25	2	5	6	5	90
人文書院	47.8%	10.0%	24.4%	3.3%	3.3%	5.6%	5.6%	100%
個数	43	9	22	3	3	5	5	90

直説法現在の mögen については 90 個の使用を確認した。このうち可能性を表す「かもしれない」の用法が一番多く見られた。次いで願望を意味する「したい」の用法が続いた。一方、当発表で焦点を当てている可能を表す「できる」の用法についてはその数が非常に少なく、割合にして 10% 以下であった。

1 山下肇訳 1962 年、『ゲーテ全集 第六巻 ウィルヘルム・マイスターの遍歴時代』、人文書院

2 登張正實訳 1981 年、『ゲーテ全集 第八巻 ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代 —もしくは諦念のひとびと—』、潮出版社

3 Goethe, Johann Wolfgang von (1982) : Wilhelm Meisters Wanderjahre, In: Goethes Werke, Bd. 8. - München

mögen の接続法 I 式

接mögen	かもしれない	できる	したい	その他	不明	訳なし	計
潮出版社	25.7%	8.6%	34.3%	22.9%	5.7%	2.9%	100%
個数	9	3	12	8	2	1	35
人文書院	25.7%	14.3%	31.4%	20.0%	5.7%	2.9%	100%
個数	9	5	11	7	2	1	35

mögen の接続法 I 式については 35 個の使用を確認した。このうち可能性を表す「かもしれない」の用法と、願望の「したい」の用法、あるいは「要求」の用法がそれぞれ大きな割合を占めている。一方、この語形の mögen においても「できる」の用法は少ない。

mögen の直説法過去

<i>mochte</i>	かもしれない	できる	したい	その他	不明	訳なし	計
潮出版社	46.5%	7.0%	20.9%	4.7%	16.3%	4.7%	100%
個数	20	3	9	2	7	2	43
人文書院	46.5%	7.0%	20.9%	4.7%	16.3%	4.7%	100%
個数	20	3	9	2	7	2	43

mögen の直説法過去 (*mochte* 等) については 43 個の使用を確認した。この語形も可能性を示す「かもしれない」の用法と願望を意味する「したい」の用法が多く見られた。その一方で、「できる」を意味する可能な用法は 10% 以下の使用率であった。

möchte

<i>möchte</i>	かもしれない	できる	したい	その他	不明	訳なし	計
潮出版社	36.3%	6.6%	44.0%	5.5%	3.3%	4.4%	100%
個数	33	6	40	5	3	4	91
人文書院	37.4%	6.6%	42.9%	5.5%	3.3%	4.4%	100%
個数	34	6	39	5	3	4	91

接続法Ⅱ式の形である *möchte* について、91 個の使用を確認した。現代ドイツ語では「願望」の用法で用いられることの多い *möchte* だが、その用法はゲーテ時代でも多く確認することができた。また現代ドイツ語ではあまり見かけることのない可能性を表す「かもしれない」も多く見られた。「できる」の用法はこちらも非常に少ない割合であった。

まとめ

<i>mögen</i>	かもしれない	できる	したい	好きである	その他	不明	訳なし	計
潮出版社	39.4%	7.3%	33.2%	0.8%	7.7%	6.9%	4.6%	100%
個数	102	19	86	2	20	18	12	259
人文書院	40.9%	8.9%	31.3%	1.2%	6.6%	6.6%	4.6%	100%
個数	106	23	81	3	17	17	12	259

最後に *mögen* 全体について述べたい。ゲーテ時代の *mögen* の用法は、『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』を調べた限りでは現代ドイツ語に近いと言える。当シンポジウムで焦点を当てている「できる」の用法の使用数は非常に少ない一方で、願望の用法や可能性の用法は多く見られた。ただし *möchte* は古い用法を残している。

〈参考文献〉

Goethe, Johann Wolfgang von (1982) : *Wilhelm Meisters Wanderjahre*, In: *Goethes Werke*, Bd. 8. München.

COSMAS II - Corpus Search, Management and Analysis System - IDS Mannheim (ids-mannheim.de) (2021年11月19日確認)

登張正實訳 1981年、『ゲーテ全集 第八巻 ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代

関西大学独逸文学会研究発表概要（第113回研究発表会）

—もしくは諦念のひとびと—』、潮出版社
山下肇訳 1962年、『ゲーテ全集 第六卷 ウィルヘルム・マイスターの遍歴時代』、
人文書院